

公共政策大学院

連携研究部・教育部長

小野紀明 教授

Noriaki Ono

Profile 1949年 東京都生まれ・北海道育ち
 1973年 京都大学法学部卒
 1994年 京都大学大学院法学研究科教授
 2006年 京都大学大学院公共政策連携研究部・公共政策教育部長



2006年4月に開学した京都大学公共政策大学院。今回はその長であり、同時に法学部で人気講義「政治思想史」を担当されている小野紀明教授にお話を伺いました。

ちなみに、巻頭インタビューの平野啓一郎さんは小野教授のゼミ出身者です。(孟徳)

教授の専門分野

History of Political Thought

—まず、教授の専門分野について教えてください。

一般的に言いますと「西洋政治思想史」です。僕の場合は「精神史」として政治思想史をやっているというのが特徴といえは特徴でしょうね。非常に抽象的な議論ばかり振り回してるように思われるかもしれませんが、僕の中ではむしろ一番現実と深い所で接触しているという意識があります。

つまり現実の制度の変化だとか、社会システムの変化だとか、そういうものを生み出していく奥にあるものは何かっていうと、これはまさにその時代の人々の生きていること、“生(Leben)”そのものです。で、精神史というのは、その一番基本にある生そのものの変化を追かけていこうっていうやり方ですから、僕にとっては、政治についての思想である



政治思想そのものも、生の変化の反映にすぎないという立場に立ちます。

我々にとっては一人一人の人間が間違いない生きてるっていうことが出発点でしょ？これはどうしようもない、否定しがたい事実なんです。そして生きている限りは否応なく他者と関わっていかざるをえない。そこから人間の思考も全て出てくるんだと。

だから、例えば西洋の近代を作り出していったデカルトの思想っていうのは、デカルト自身が考えていたわけではなくて、デカルトが生きていたあの時代の一般人が自分で体験していた「生きる」という事実そのものですね。デカルトの哲学を理解するというよりは、デカルトの哲学を手がかりとして、あの時代の人間の生そのものを何とか把握したい、肉薄したいっていうのが、精神史なんです。

—実際にどのように活かすことができる学問なのですか？

それはもう結論から言えば、みなさんお一人ずつ決めてくださいというかね、個々の問題です。でも最低限理解してほしいのは、今の自分が当然と思っている思想にしても制度にしても、それから今の自分も含めて人間が営んでいる生も、決して自明ではないっていうことですよ。過去に違う生き方もあったんだと、それがその当時の人にとっては当たり前だったんだと。自分を相対化した上で、過去

と”対話する”っていうことは望みたいですね。僕は授業の場で聴講してる人に基本的に何も望みません。そういう押し付けがましい授業はしたくないと思ってますから。だけれども、敢えて1つだけ望むとすれば、今申し上げたようなことです。対話した上でどうそれを受け止めるかはみなさんの勝手だけれども、そもそも過去との対話を拒否するっていうことは、できればしてほしくないですね。

公共政策大学院について

What is "School of Government"?

—教授が研究部長を務められている(※2008年3月まで)公共政策大学院とは、どういったものですか？

公共的な職務——だから典型は中央・地方の公務員ですけれども、公務員に限らずマスコミ、シンクタンク、NPO、NGO、場合によっては今は民間私企業でも——まあ言ってしまうとあらゆる分野で、日本の公益・全体的な利益に奉仕するような職務に就く専門家を養成する大学院です。法科大学院やビジネススクールと同じで、専門職大学院(2年間の修士課程を終えて実務に就く人のための大学院)というカテゴリーに入ります。

—2006年の開学に至った経緯は？

どうも公務員の質が下がってるっていう評価は当の公務員が感じてることなん

はみだし
すてーじ

はみだしたくない
⇒はみだしが嫌なら記事を書くしかないですね。

(農・2 もるもつと)
(前代未聞の2月新歓；編)

です。だから今までの公務員試験も、学部での教育も変えるべきだと。日本全体の高学歴化っていうのが大きな背景としてはあって（まあ何せ50%が大学に行く時代ですから）、学部を出ただけではやっぱり指導的な立場に就いていくには不足であるということで、もう少し高度なことを体系的に教える専門職大学院っていうのが数年前から大きな流れとして出てきたんですよ。

東京大学は2004年に公共政策大学院を作ってます。で、京大は伝統的に東大と並んで公務員を送り出してきましたから、東大が作ってしまったのに京大が作らないわけにはいかないということで、うちも作ろうという話になったんです。

——法学研究科で政治思想史を担当されている教授が、トップという形で関わる

教授の学生時代

As a student

——教授はどんな学生時代を送られたのですか？

僕が京大に入ったのが1969年です。大学紛争がまだまだ真っ盛りのところでしたから、1・2回生のときには教養科目はほとんど開講されてなかったんです。開講しても潰されてたんです、闘争していた学生さんに。だから、大学に行っても授業がないんですよ。ですから下宿で好きな本読んでるか、麻雀してるか（笑）。まあまともに勉強しなかったですね。少なくとも大学の授業なんてまともに聞きませんでした。それは僕だけじゃなくて、あの当時学生生活を送った京大生はみんなそうです。

僕らの学生時代は、まずマルクスを読まなきゃっていう風潮があったんですよ。だからマルクスを読みました。

京大の今

Considering the present

——今の京大生を見て感じられることはありますか？

とにかく物を考えないね、今の京大生は。やっぱり現実引張られるのはあ

ことになったのはなぜですか？

京大の公共政策大学院では、基礎的な分野を大事にするっていうのが1つの柱なんです。その意味では、思想史を専攻している僕が法学研究科から移籍して然るべき授業を担当するっていうことは既定路線だったんです。ただ研究部長になったのは、偶然の産物です。

管理職がもう、しんどい（笑）！ それはねえ、だって政治思想史なんて現場から最も遠い分野でしょ？ もう目を白黒する毎日でした。それでも今までやってこられたのは、僕の力っていうよりは、他の同僚の先生方、それから事務の職員の人の力。そして何と言っても学生さんが、みんな物わかりのいい良識ある学生さんだったから、トラブルもありませんでした。



る意味しょうがないんだけど、それ以上に、自分で何か極めたいっていうのが……ないんでしょうねえ。

それとやっぱり、人の評価を気にしすぎますね。それは日本社会がそうであって、その反映にすぎないと思います。けども、そうなんだろうけども、やっぱり京大にはそういう時代の風潮に敢えて抗するっていう人間に集まってほしいっていう気はしますよねえ。京大っていうのは変な、使いにくーい奴らの集まりだけど、しかし何か持っている、何かどでかいことをするかもしれない、みたいな期待を抱かせる。それが伝統的に京大が育ててきた人材ですから。

ただね、やっぱり他の京大以外の大学だったらもう絶滅してしまったような人種が京大にはまだ残っているというところはあります。

Q&Aコーナー

Q：愛読書は？

A：やっぱり『暗夜行路』。志賀直哉の。

Q：座右の銘は？

A：「我、事において後悔せず」。これも愛読書の1つなんですけど、吉川英治の『宮本武蔵』の中で武蔵が言う言葉です。

Q：お好きな歴史上の人物は？

A：誰だろう、あんまり考えたことないなあ……ニーチェにしといてもらおうか。ただただ誠実な人。いい人だと思うよ（笑）。

Q：ご趣味は？

A：音楽聴くのと、熱帯魚。それからペランダで草花です。鉢植えの。

Q：お好きな音楽のジャンルは？

A：クラシックとジャズ。好きな作曲家を1人挙げるならブルックナーです。

Q：お酒はお好きですか？

A：僕はね……雰囲気は好きです。酒の席には喜んで出てきますけども、自分は飲めない。残念ながら。

Q：らいふすてーじをご存知でしたか？

A：知りませんでした。見たら、色々ためになる情報が載ってるんですね。これからは読ませていただきます。

——最後に、読者へメッセージを。

人生で学生時代が一番いいんですよ。なぜかって言うと、“当為”から解放されてるんです。何々すべきだっていう義務みたいなね。それで社会的なルールからも比較的解放されてるし。「学生がやった」ってことで世間は目に見てくれることがいっぱいあるんです。だからそういう境遇・そういう時代を謳歌すべきだと思います。エンジョイしなさい、そんなに義務感に駆られるなど。

もう社会に出たらほんつとに、がんじがらめですよ、今の日本は。僕はそれがわかってるから、可哀相でね。今だけです。だから大学、それも特に京大っていうような、放っておいてくれる大学にいるんだったら、そういう自分の今の状況を思いきり楽しむのがいいと思います。

——ありがとうございました。

はみだし
すてーじ

残金100円で半月過ぎました。
⇒是非とも本を出してください。

(医・2 もう疲れました…)
(普通に気になる；編)